

日本における「豆と藁と炭」の旅

久保 華譽

はじめに

豆と一口に言っても様々な種類があるが、豆には大なり小なり、黒かったり白かったりしながらも皮に筋がついていることが多い。中でもソラマメの黒い筋は目を引く。この筋が付いている訳を語る昔話は、グリム童話にも収められ、アールネ、トンブソン『昔話の型』でも二九五番の話として紹介されている。分布は、エストニア、ラトビア、リトアニア、デンマーク、フランス、フランドル、ドイツ、ハンガリー、ロシア、インド、アメリカ（黒人、インディアン）、西インド諸島など、かなり幅広い。一方、わが国でも青森から沖縄に至るまで語られ、管見の限りで八〇話近く報告されている話である。この話が明治期の日本で紹介され口承に影響したのではないかという可能性と、日本人がどのように受容して語ったのかを考察したい。

『昔話の型』では、*The coal burns the straw in two and*

falls into the water. The bean laughs till it splits. と大まかな型のため、グリムや日本の昔話を基に次のような梗概をまとめた。

I. 出会い

お婆さんが豆を煮ようとする。鍋から豆が、かまどから炭が、藁が、命からがら逃げて来る。

II. 橋になる藁

旅に出ることを決めた豆と藁と炭は、川に行きあう。

藁が橋になり、(a) せっかちな炭が先に渡ると『グリム』(日本の昔話にもあり)、(b) もしくは豆は無事に渡るが、次に炭が渡ると、藁に火がつき川に落ちて流れてしまう。

III. 怪我をする豆

見ていた豆はあまりの可笑しさに大笑いすると、(a) 口が (b) もしくは腹が裂けてしまう。

IV. 黒い筋が付く訳

豆が痛くて泣いていると、通りかかりの人（仕立て屋《グ
リム》、富山の薬屋、瞽女、裁縫帰りの娘など《日本の
昔話》）が黒い糸で縫ってくれる。そのため豆には黒い
筋がある。

(Cf. A T 二九五、K H M 一八、大成四三、通観五七三)

マメ知識

本題に入る前に、訳によつて豆の種類が変わるので、豆につ
いて整理したい。もともと普及している決定版の七版の原典は
『Bohne』つまり単なる「豆」と書かれているがこれは、主に
ソラマメとインゲンマメを指す言葉である。また日本では金田
鬼一はソラマメと訳し、関敬吾はただの「豆」と訳している。
結局、ドイツでも日本でも訳す人のイメージに任されていると
いう状態だが、やはりソラマメが多く、見た目もソラマメの方
がこの話には合うと思われる。ソラマメの特徴としては、まず
旬が四月から六月と短いためはつきりとした季節感があること
が挙げられる。また五〇〇年以上前から栽培されており、日
本では中国伝来のものを行基が紹介したと言われている。しか
し一般的になるのは遅く、文献には江戸時代から出てくるよう
になる。後で触れるが、新潟にこの話が多いので、調べてみる
と新潟では昭和五〇年代から転作の作物として多く生産される
ようになったようだ。

一、先行研究

それでは、まず「豆と藁と炭」に関する先行研究を整理したい。
まず、柳田國男は『日本昔話名彙』²で、「グリム兄弟の採集した
話の中に日本でそっくり同じ形を持ったもの、或は似よつたも
のがある。五十位有るという人もあります。この中若干のもの、
例えば「豆と炭と藁しべ」「猫と鼠」「手なし娘」「鹽吹臼」な
どの話は、彼方から日本に輸入したといふ人も有りますが、そ
れは南蠻貿易が始まつて後といふ事が明確に分るのならばとも
かく、それ以前から傳はつたものもあるでしょうし、又新らし
い交通の影響の到底及びそうも無い地方に有る話などは、輕々
しく輸入だなどと謂ふことは出来ません」と昭和二十二年に述
べている。柳田は、かなりはつきりと伝播を否定している。

一方、初めて「豆と藁と炭」を話者から聞いたとき、日本に
もこの話があるのかという驚きの興奮でその夜は寝られなかつ
たという新潟の水沢謙一は精力的にこの話を集めた。実際に話
者から確認したことを基に、豆の腹の縫い手である旅の商人、
瞽女、富山の薬屋などが、話の伝播者であると述べている。ま
た、朝鮮半島にはないようだが、インドや中国にはあると指摘
し、伝播に関して問題提起をしている。しかしインドには確認
できるが、現在のところ、中国の話は見つけることは出来なかつ
た。大陸伝いということでもないようだ。現在では、竹原威滋「日
本のグリム三兄弟」⁴や大島廣志「書承から口承へ」⁵ではグリム

童話の翻案が日本でも広まり、日本の口承に影響を与えた例を挙げながら、この「豆と炭と藁」も同様であろうと指摘している。

さて高木敏雄は『童話の研究』⁶の中で、「豆と藁と炭」の話がドイツでは修身教育の教材となっていることを紹介している。例えば、修身教育に童話を使うことを提唱したチルラー⁷は、ヘルバルト派⁸の教育者で、十二話あげた中で「豆と藁と炭」を四番目に教えるべきとした。『童話教育』の著者であるユストは十二話中三番目、また、エナ市は十四話中七番目、アイゼナツハ市は十二話中三番目に挙げている。つまり、この「豆と炭と藁」は上位に入っており、修身教育において重きが置かれていると言える。

一方、わが国でも明治期における学校制度の確立に最も影響力があったのは、ヘルバルト主義の教育であると考えられている。平松秋夫⁹は、ヘルバルト主義の教育が、どんな影響をもたらしたかについて六点挙げている。その内の二点が、修身科を重視したこと、童話の研究を促進したことである。「豆と藁と炭」は、本国ドイツのみならず、日本でも教育に使われたことは想像に難くない。

二、明治期の翻訳

それでは、「豆と炭と藁」はどのように明治時代に訳されていたのだろうか。野口芳子他『日本におけるグリム童話翻訳書

誌¹⁰』及び、管見のかぎりで、七話訳されていることが分かった。はじめに明治二十年にローマ字表記でイムラチユースケにより「豆の話」と題して訳されているが、この訳に関しては直接当たることが出来なかった。しかし、内容は直訳のようだ。その為、これ以外の六話を見て行こうと思う。

まず、一話目は明治二四年に洪江保が訳している。題は「藁と石炭と蠶豆」¹¹。挿絵も呼び名も擬人化しておらず、行き先は、他国へ逃げ出すことになっている。洪江保は他にもグリムの話¹²をこの『学講話材料 西洋妖怪奇談』の中で訳しており、他の話はかなり翻案して紹介している。しかし、この炭と豆と藁の話はほとんど直訳と言える。ソラマメを醬油で味付けする以外は、豆が慎重に振舞い、仕立屋が慈愛を持つて豆に接するなど、グリムの通りである。洪江は、この話はあまり脚色の仕様がな¹³いと考えたのだろうか。

一方、次の巖本善治の訳は翻案といった方がい¹⁴だろう。明治三〇年に「豆蔵の口」¹⁵として当時の子ども達に大人気だった「少年世界」に掲載された。巖本善治は、「女学雑誌」を創刊し、アンデルセンの「裸の王様」も初めて訳し「子どもに勧懲の旨を面白く教ゆる」昔話や児童文学の必要性を説いた人物である。やはり「豆蔵の口」も時代を超えた面白さがある。豆の種類はエンドウで登場人物は擬人化され、名前も豆蔵、炭九郎、藁兵衛となっている。行き先は伊勢参りで、季節の頃は春、援助者は、御針の稽古帰りの女の子と大分日本風に翻案されている。ここ

で、豆に豆蔵と名付けているが、これは、秋田や山形で採集されている語り物に出て来る名前だ。秋田の例を引こう。

とことこ豆蔵（まめぞ） 豆蔵の来る年やあ よい年だ

大鯛小鯛 恵の鯛 プンとはねれば黄金（こがね）の鯛

豆蔵が来て 飲みたい食べたいと言うならば

五杯三杯飲ませてやれ

それでも足りぬなら背負わせてやれ

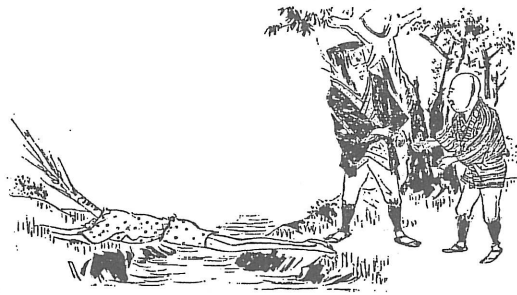
背負わせて迷惑だ

豆蔵の頭はこぶだらけえ¹³

「鯛」や「こぶ（昆布に掛ける）」など祝いの詞章がテンポよく語られる。このような万歳で回ってくる豆蔵が下敷きになっているのではないかと考えられる。下段の「挿絵二」を御覧いただきたい。この脚絆をつけた格好は正に万歳の格好とも言える。また山形の花坂爺の話である「犬こむかし」でも良い爺と隣の爺がそれぞれ、まめぞとせやみぞとして登場する¹⁴。まめぞは働き者、せやみぞは怠け者の意味だが、このような言い回しがあるため、豆蔵という名前は受け入れやすい下地が出来ていたと考えられる。

さらに、話の表現として、豆に対して「友達の災難にもかまはず、何が可笑しいやら大きな口を開けて」と非難する。また、全体的に江戸っ子風というのだろうか、軽快に書かれている。例えば援助者の女の子は「豆蔵の可笑しな様子を見て、笑い度もあり、気の毒でもあり」と思い、黒い筋が入った様子を「そ

【挿絵一】巖本「豆蔵の口」



【挿絵二】湯本「をてんばまめ」



の風が切（かえ）ってよいと云ふので、どの豆も豆も、此豆蔵の真似をして、口を黒く染めたので」筋が付いたと描く。

三話目の湯本武比古による「をてんばまめ」¹⁵は、修身童話として訳される。主人公は、そのまま、むぎわら、薪のもえぐれで、他国へ逃げ出そうとする。援助者は仕立て屋で、グリムのままであるが、最後に「人は他人の憂を楽しむべからず。人は常に用心すべし。」と教訓が付く。また特徴的であるのは、話の後に、

ヘルバルト派のライン (Wilhelm rein 1847-1929) 案による「をてんばまめの教授法」が付いていることだ。いくつか次に抜粋しよう。

第二段階（授与階段）「そらまめ」は如何なる厄難に瀕せしかを語れ。誰が「そらまめ」を助けしか。三人とは誰々であるか。此の三人は、眞の善き朋輩と曰はるるか。何故眞の善き朋輩と曰はれざるか。誰が不幸を醸せしか。何故か。「そらまめ」は如何にあるか。「そらまめ」は何を為すべきであるか。「そらまめ」の、「むぎわら」や「もえぐれ」から受けた罰は如何ん。

第三段階（聯合段階）誰が尚ほ困難しつつあるか。誰が之を助けしか。「そらまめ」の不幸を見て、笑はざりし者は誰か。

第四段階（結合段階）人は他人の憂を樂しむべからず。人は常に用慎すべし。

第五段階（応用段階）汝等是如何して互に相扶くべきか。互に相扶けし朋友の話しを知る者あるか。例Ⅱ若し誰かが水に溺れし時、又は若し誰かが火傷せし時等。如何なる場合に於いて、汝等は用慎すべきであるか。（火の側、摺附木、車馬の来りし際、道路に於いて）若し老たる貧しき女が路上にて躓き倒れしを見る時、汝等之を笑ふか。他人の憂を見て、樂しむ者は誰か。他人の憂を樂しむ者は、如何なる目に逢ふか。¹⁶

この短い他愛の無い話を修身の教材に掘り下げていることに改

めて驚嘆してしまふが、子どもに問いかけて模範解答にどのように導くか懇切丁寧に記している。

四話目は、木村小舟が『教育お伽噺』の中で「藁と石炭と菜豆（インゲン豆）の旅行」¹⁷と題し明治四一年に訳している。豆はインゲンマメで、援助者はやはり仕立て屋だ。訳者である木村は、前述の「少年世界」にも数多く執筆している。わが国初の児童文学作家であり口演童話運動の第一人者である巖谷小波の一番弟子として有名だ。彼はこの本の中で、本文の上位に幾つかの質問の小見出しを付け、教材となるように訳している。例えばその小見出しには「三人は如何なる約束をしたか」と書かれ、その下の本文には「何時迄も仲のよい友達でなくちゃ」という会話が書かれている。やはり『教育お伽噺』として機能しているようだ。

このように二話目の巖本から四話目の木村までは友達甲斐のない豆を非難して訳している。ところが五話目は、その部分がなくするのである。この「藁と薪と蠶豆」¹⁸は近藤敏三郎が明治四三年に訳している。主人公は、藁、薪、蠶豆で原典と変わらないが、梗概で示したⅢ、Ⅳが削除されているのだ。つまり、藁と炭が流れて行ったあと、豆は笑うことをせずに「阿陀仏阿陀仏」と唱えるのである。これでは黒糸で縫われる訳もなく、豆特有の黒い筋の由来譚とはかけ離れてしまった。話末の解説では、「禍福は糾える縄の如し」「人事を尽くして天命を待つ」という内容の教訓で締めくくっている。今までの教訓とは

異なる。続く六話目の和田垣謙三・星野久成らによる「藁と薪と豆」¹⁹でもⅢ、Ⅳがカットされている。主人公は豆坊主、薪君、お藁さんで、豆坊主は「南無阿弥陀仏、阿弥陀仏」と唱え、話末の解説では「豆坊主は何處までも豆坊主らしいぢやありませんか、サテ世の中は一難去つて又一難来ると云ふやうに、種々の艱難に出遭いますから、毫しも油断は出来ません。要するに此斬は人間が浮世を渡る有様に似て居ます。」としている。行き先も、五話目の近藤が「危なげのない山へ」と訳しているが、同様に「人目にとまらぬ山の中」を指すことにしており、内容、解説と共に細かい部分も似通っている。近藤と和田垣らの訳は、両者の影響関係が考えられるが、友達の災難を笑うのではなく、経を唱える殊勝な豆として描かれている。本来、豆が大笑いして腹なり口が裂けねば、黒い筋の由来は語ることは出来ない。このような大切な話の骨子を削除してでも、豆が悪者になるのを避けているのが特徴的である。

三、口承資料

それでは、この話は昔話としてどのようにわが国で語られているのだろうか。『日本昔話大成』、『日本昔話通観』を参考にし、その他管見のかぎり集め、一覧表にまとめてみた。文末の日本における「豆と藁と炭」口承資料一覧を参照いただきたい。

(a) 日本風にアレンジ

まず豆と藁と炭の行き先だが、上方参り、伊勢参りなどお参りが多い。同様に援助者も上手く日本化していると言える。グリの仕立て屋に対して、富山の薬屋、旅の商人、瞽女などただの通りすがりというよりも旅をする人々が登場する。前述の水沢謙一の指摘のように旅する伝播者が援助者として登場することも多いようだ。²⁰特に、富山の薬屋は一覧表でも見ても、一番多い。更に表七六の宮崎県の事例では、話者は「新潟県にある富山の薬屋さん」から聞いたと述べている。²¹富山の薬屋が積極的に伝播に関わっていることが伺える。

また一覧表の備考の欄に書いたが、豆の特性などを絡めて語っていることもある。表二一の新潟県の話では「それで今も、豆は煎られて、まっかな火を見れば、笑いだして、あんげに豆の腹のふが切れるてがだ。」と語っている。表三六の話も同様だ。また、腹が痛くて下を向けず、空ばかり見ているのでそら豆という由来が付くものもある。同じく新潟県の話だが表二〇、三四である。表一九の話では、黒糸で縫ってもらった後、匂いのする薬を塗ってもらったので、クラカケ豆は臭いと語る。また、表十の群馬県の話では、豆が、腹が切れて泣いていると、「『それじゃあおれがむこうへ渡してやるから』ちゅうで、ガンがくわえてむこうへもつてってやった」。雁がくわえたので平たい「がんくい豆」になったという由来話にもなっている。グリム童話そのままではなく、上手に取り込んでいる例といえる

だろう。

(b) 書承の影響

さて、一覧表のモチーフには、冒頭部分がある場合はAを記入している。つまりAがあれば、梗概のIが語られていることを指す。このおばあさんが豆を煮ようとして、という部分は、グリム童話でも第二版までは語られない。第三版以降、グリム兄弟が、書物より引用して付け加えたものだ。²²明治期の翻訳ではすべてこのIの部分があり、口承資料の中にも十三例Aを持つ話がある。書承の影響が考えられる部分ではないだろうか。少し話は脇道にそれるが、口承で語られる時、Iの部分は脱落しやすいのではないだろうか。日本の口承資料の中ではIがないほうが圧倒的に多い。元々なかったIを、グリム兄弟が書物を参考に後で付け加えても、また口承に戻る時にはなくなっているのである。これは、興味深い点でもある。

また、この口承資料の中に、「少年世界」掲載の話と酷似している話がある。それは、表六の宮城県資料である。主人公たちの名前がきちんとあり、豆蔵、藁三郎、炭五郎になっている。これは、巖本の「豆蔵の口」の豆蔵、藁兵衛、炭九郎によく似ている。加えて、援助者も同様の裁縫帰りの娘だ。裁縫帰りの娘というのは、巖本の訳のみであるが、裁縫帰りの娘やお針子が援助者である話は、表二の岩手県、表九の山形県、表五一の山梨県、表五九の三重県でも語られている。

更に話者に注目してみよう。他にも外来と思われる、もしくは書承からと考えられる昔話を語る話者が多いのである。例えば、表一四の新潟県の馬場マスノさんは、はっきり水沢謙一の本から知ったと述べている。²³また表四二から四四の波多野ヨスミさんも様々なバリエーションの「豆と藁と炭」を語っているが、六百話以上語る素晴らしい語り手だ。その中には、「金の斧」「イソップ」「人魚姫」「アンデルセン」や「ブレーメンの音楽隊」(グリム)が元になっていると推察できる話も含まれている。表七三の佐賀県の松尾テイさんも二百話以上の語り手だが、やはりイソップの「蜜蜂とゼウス」や「雁と亀」なども語っている。

更に、生徒が集めた話が幾つかある。これは、普通の調査の資料よりも、グリム童話など外来と思われる話が多く混じる傾向があるのではないだろうか。表二二の埼玉県、表五三・五四の静岡県、表七七の長崎県の話がそうである。表二二の鈴木棠三「川越地方昔話」編纂時には、他にも「漁師とその妻」(グリムやロシア民話)が集められ、²⁴表五三・五四の資料には、「二つ目、二つ目、三つ目」(グリム)も収められている。こういった特色を持つ生徒が集めた話の中に「豆と藁と炭」があるのである。

(c) 新しい話

加えて、変形した話も見受けられる。一覧表では備考に★で示している。まず表一三の新潟県の話は、短いので全文紹介しよう。

昔っからの話だけもね、空豆が一生懸命歩いて行ったところが、大つかえ橋あつたせうんだね。その橋の下を覗いて見たら、みんな普通前向いて歩くに蟹が横這えんたて歩いて行つたから、空豆はね、上で見てて、

「ああ、人みんな真つ直ぐに歩いてるのに、蟹ばつか横に歩いてる。言つてね、

「あははは。」言つて笑つたんだつて。

ところが空豆は、今度大口で笑つちやつたから、口が塞がらねで、ほいで黒え糸でその空豆の口を縫つてもらつたんだ。そんでほら、空豆つてな知つてんだかね、口んとご黒えでねかい。エチャポン

空豆が歩いて行き、橋を渡るところ、そして人の所作を見て大笑いする最後の黒い筋の由来は同じだ。しかし、まるでイソップの、母蟹が息子に横歩きはいけないよ、と言つておきながら自分も横歩きしか出来ない「蟹の親子の話」と混ざつたかのような話だ。上手く繋いだなと感心してしまう。表五九の三重県の話は、前半は「犬と猫と指輪」のモティーフに似ている。出だしは、川の向うの村に行きたい猫が泳げる犬に背負ってもらうことになる。その背負つて泳ぐ様を、端で見ていた空豆は大笑いするのだ。助けてくれるのは裁縫生で、これも巖本の「豆蔵の口」の援助者、裁縫帰りの娘に似ている。

また断片もある。一覧表では備考欄に▲で示した。ただ、おしゃべりだったから、もしくはあまり悪口を言うので口を縫わ

れたと語る。表一一の群馬県、表五二の静岡県、表六〇の三重県、表七九の沖縄県の話がそうである。

このように話の形が不安定であることから、まだ定着してから時間が浅いとは考えられないであろうか。

(d) 悪者としての豆を否定、もしくは避ける

明治期の翻訳でも末期の二話は、豆が悪者にならないように翻案してしまつていた。この部分は、語るときも受け入れられ難かつたらしく、話者により非難されることもある。例えば、表二の岩手県の菅泰子さんは、豆のことを「朋輩がながれるのにも、あはは、あははて笑つてばかり居で、助けもしながつたどス。」と語る。表三、四で二回語っている鈴木サツさんも「人の難儀を笑うもんでねえ」、「人の災難を笑うもんでねえ」と援助者にそれぞれ言わせている。更に表七の山形県の話者は最後に「人のことを笑うと口が裂ける」という教訓を付けている。表六八の岡山県の守尾薫さんも、怖がる炭を豆が笑い、「炭は思いやりがないと言つて、かんかんにおこつた」ため、炭に火が付くといった話の運びにしている。

また、豆は笑つて裂けるのではなく、火傷、怪我などで縫うという話になつてしまつているものもある。例えば、表六九の山口県の事例では、藁の上を先に炭が渡つたので、藁が焼けており、次に渡つた豆が火傷をして黒い跡が付いたと語る。表七五の熊本県の事例も同様である。更に、表五六の京都府の話

では炭の代わりにえんどう豆が登場するが、そら豆はえんどう豆の危機に「友だちと三人で遊んどったのにえんどうが流れたで、そら豆が大けな口あけて、泣いたんじゃって。」と語られる。その結果墨を塗ることになるのだが、笑ったのではなく、泣いたからそうなったとしている。

加えて、駄洒落など笑い話化している話もある。例としては、表五八の京都府の話では、藁ではなく箸が橋の代わりに横たわる。そして竹馬が渡って橋が折れ、それを見た「くつはクツクツと笑い、下駄はゲタゲタと笑う」⁽⁵⁾。その後そら豆が笑って口が裂けるのだが、箸、くつ、下駄と駄洒落が続く。また表七〇の高知県の話では、大豆、炭、藁に加えて豆腐が歩いて行く。すると、豆腐と炭が先に渡り「渡りよつた豆腐がどぶんと小川へ落ちてしもうて、トフトフと言いまつて流れていきましたと」⁽⁶⁾。この後は同じ結末だが、全体的に可笑し味を持って茶化すように語られている。

これらは、やはり友達の災難を笑ってしまうという豆に共感しにくいのではないだろうか。

まとめ

「豆と藁と炭」の話は比較的新しい話であり、お伽噺を通して修身教育を行うヘルバルト主義に支えられ、特に「少年世界」の巖本、口演童話に携わった木村を代表とする明治時代の翻案

を通して口承に影響を与えたと考えられる。更に、グリムの援助者は仕立て屋だが、わが国では旅をしている援助者が多くみられる。彼らがこの新しい話を運び、その結果日本の口承に定着していったのではないだろうか。そしてそのまま語るのはなく豊かに語り変えていつている。

その際、友人の災難を笑う豆に共感しにくい為、道徳的に語る場合やコミカルに語る場合、そして火傷や怪我などの理由付けに変更する場合などが見られる。

注

- (1) Antti Aarne, Stith Thompson “The types of the folktales” second revision, Helsinki 1961
- (2) 柳田國男『日本昔話名彙』日本放送出版協会 一九四八年
- (3) 水沢謙一「昔話研究」とはじめ」『昔話を追って』新渇日報事業社 一九七九年 所収
- (4) 日本昔話学会編『昔話研究と資料』二七号 三弥井書店 一九九九年 所収
- (5) 『口承文藝研究』第二六号 日本口承文藝學會 二〇〇三年 所収。
- (6) 高木敏雄『童話の研究』講談社学術文庫 一九七七(初出一九一六)年
- (7) ツイラー (Tustlon Ziller 一八一七—一八八二) のこと。彼はヘルバルト主義教育の担い手で、ヘルバルトの理論

を展開していった。

- (8) ヘルバルト (J. F. Herbart 一七七六—一八四二) は、ルソー

やペスタロッチの教育思想を体系化し、物事を段階に分けて理解させて行く方法をとった。その四段階の理論として「明瞭」(個別の知覚)・「連合」(表象の連合)・「系統」

(多数のものの関係・秩序)・「方法」(応用)を掲げた。

- (9) 平松秋夫『明治時代における小学校教授法の研究』理想社 一九七五年

- (10) 川戸道昭、野口芳子、榊原貴教『日本におけるグリム童話翻訳書誌』ナタ出版センター 二〇〇〇年

- (11) 渋谷保『学講話材料 西洋妖怪奇談』博文館 一八九一年

- (12) 巖本善治『豆蔵の口』『少年世界』(三十一、六) 一八九七年所収

- (13) 小堀光夫責任編集「伝承文藝 第十七号」國學院大學民俗文学研究会 一九九〇年

- (14) 野村純一・藤原岳良・矢口裕康責任編集『飽海郡昔話集』荻野書房 一九七九年

- (15) 湯本武比古「をてんばまめ」「いぶとり」修身童話8巻 開発社 一九〇〇年

- (16) 旧字体は新字体に改めた。

- (17) 木村小舟『教育お伽噺』博文館 一九〇八年

- (18) 近藤敏三郎「藁と薪と蠶豆」『新訳解説 グリムお伽噺』精華堂書店 一九一〇年

- (19) 和田垣謙三・星野久成「藁と薪と豆」『家庭お伽噺』小川尚栄堂 一九一〇年

- (20) 水沢謙一の『ろばたのトントムカシ』野島出版 一九七一年や『ふるさとの夜語り』野島出版 一九七二年の注を参照。

- (21) ロバート・J・アダムス調査「日向民俗22」日向民俗学会 一九六七年 宮崎県東諸県郡綾町における調査で、この話者は、他にも「佐賀・鳥栖の薬屋さん」からまた別の話を聞いている。

- (22) 吉原高志・吉原素子『初版グリム童話集1』白水社 一九九七年

- (23) 民話と文学の会『馬場マスノ昔話集』一九九一年の注による。

- (24) 野村純一『柳田國男未採択昔話聚稿』瑞木書房 二〇〇二年

- (25) 稲田浩二・小沢俊夫『日本昔話通観 第14巻』同朋舎 一九七七年 原典に当たらず、通観の梗概から引用した。
(くぼ・かよ／國學院大學大学院特別研究生)

日本における「豆と藁と炭」口承資料一覧

話者住所、採集場所	行き先	援助者	豆	メモ	備考（ ）は伝承経路	話者（報告者）	出典
1 青森県西津軽郡木造町	上方参り	富山の葉屋	BD	豆		成田ツル（T 8 生）	加藤鶴子・佐々木徳夫『日本の民話2』きょうせい、1978
2 岩手県九戸郡軽米	上方詣り	お裁縫子	ABD	話者、豆を非難		菅泰子	平野直「けねこ・たんばご第二集」未来社、1988
3 岩手県遠野市新町	旅	旅人と娘	BD	「人の難儀を笑うもんでねえ。医者 を呼んでくるから…」		鈴木サツ（M 44 生）	「遠野に生きつづけた昔」講談社、1976
4 岩手県遠野市綾織町	旅	旅人と娘	BD	旅人が「人の災難を笑うもんでねえ」		鈴木サツ（M 44 生）	工藤統一「鈴木サツ自選50話 遠野むかしばなし」1987
5 宮城県登米郡南方町	逃げ出す	医者殿	AB D			佐々木徳夫『日本の昔話 11』日本放送協会、1975	
6 宮城県登米郡中田町	散歩	お裁縫唄りの娘	BD	豆蔵、炭五郎、藁三郎		青木のゑ（M 28 生）	佐々木徳夫『むかし、むかし、あつとごね』未来社、1989
7 秋田県能代市	東京見物	医者	D	◎隅田川 藁の節、石炭の色の由来 人のことを笑うと口が裂けるという 教訓つき		飯坂寛之助（M 43 生）	國學院大民俗文学研究會「伝承文庫」第16号、1990
8 ※山形県最上郡最上町	伊勢参り	焼けた藁	BD				佐藤義典「ききみ」
9 ※山形県飽海郡遊佐町		お裁縫唄りの娘					渡邊節子「菅原節子さんの昔話」1975
10 群馬県利根郡水上町	旅	ガフ	B	◎U 脱藩。雁が啞えて川を渡してく れる。がんくい豆		林義明（T 1 生）	「きつねのあくび」日本民話の会、1982
11 群馬県勢多郡大胡町			D	▲壺口ばかり言うので。糸を間違え 黒糸で			大胡町役場編「大胡町誌」1976
12 埼玉県北企野郡本村	逃げ出す	お裁縫の先生	AD	そら豆。藁がじやんけんに負け橋に		杉浦奈賀子（二年）	鈴木葉三「川越地方昔話」民間傳承の會、1987
13 新潟県中頸城郡中郷村	歩いている と	—	D	★◎壺の横歩きを橋の上から大口で 笑い、口を縫う		岡原キミ（T 1 生）	立命館大学説話文学研究會「中郷村のむかしばなし」 2002
14 新潟県北魚沼郡守門村	上方参り	富山の葉売り	BD		（水沢謙一の本）	馬場マスコ（M 38 生）	民話と文学の會「馬場マスコ昔話集」1991
15 新潟県長岡市麻生田町	京参り	富山の葉屋	BD			下条堂美 64 歳（S 44）	水沢謙一「赤い間耳ずきん」野島出版、1989
16 新潟県長岡市濁沢	逃げ出す	あきんど	ABD			藤井ヨセ 40 歳（S 32）	水沢謙一「じんと昔があったげど」未来社、1988
17 新潟県長岡市宮内町	上方まいり	旅の商人	BD	白い糸がないから		稲田ハル 55 歳（S 44）	水沢謙一「全国昔話資料集22」岩崎美術社、1977
18 新潟県長岡市成願寺町	山へ遊びに	じさ	BD			水沢キミ 45 歳（S 46）	水沢謙一「ふるさとの夜語り」野島出版、1972
19 新潟県長岡市成願寺町	上方まいり	くすり売り	BD			高野アサ 68 歳（S 42）	水沢謙一「ふるさとの夜語り」野島出版、1972
20 新潟県長岡市西蔵王町	京まいり	いとしげな娘	BD	ササキ豆 腹痛で下を向けず空を見 せないときがない		池田チセ 75 歳	水沢謙一「おばあ昔ばなし」野島出版、1965
21 新潟県長岡市神田町	三人で旅	なし	BD	今でも火を見ると笑って腹が切れる		堀キヨ 57 歳（S 33）	水沢謙一「いきがボーンととされた」未来社、1968

22	新潟県長岡市季崎町	京まいり	富山の薬屋	BD	豆は先に上手く渡る	増間ミヨ 47歳 (S 35)	水沢謙一『雪国の夜語り』野島出版、1968
23	新潟県長岡市蔵王町	町見物	富山の薬屋	BD		渋谷のぶ 51歳 (S 41)	水沢謙一『雪国の夜語り』野島出版、1968
24	新潟県長岡市高見町	京まいり	昔女		どちらが先か炭と豆が喧嘩	安藤マス 74歳 (S 50)	水沢謙一『昔女のごめなんしよ昔』講談社、1976
25	新潟県長岡市滝谷町		薬屋	ソラマメ	サヌキ豆と炭が喧嘩	高橋ナオ 84歳 (S 49)	水沢謙一『雪国のおばあけの昔』講談社、1974
26	新潟県長岡市酒吉町	京参り	富山の薬屋	BD	川風で炭に火が ^さ	山田ヤイ子 48歳 (S 50)	水沢謙一『昔女のごめなんしよ昔』講談社、1976
27	新潟県東蒲原郡津川町	山の神参り	薬屋	BD	かや 縫わないと死ぬと言われる	清野一太 (M 40生)	大東文化大学民俗学研究会『長谷屋の昔語り』桜楓社、1981
28	新潟県小千谷市	三人で旅	旅の商人	BD		阿部スガ 82歳 (S 43)	水沢謙一『ちばなのトントムカシ』野島出版、1971
29	新潟県十日町市	善光寺参り	富山の薬屋	BD		山田武雄 79歳 (S 63)	十日町市史編さん委員会『十日町の昔ばなし』1993
30	新潟県十日町市	上方参り	村のおばば	BD	髪にさしていた黒い糸の針で	尾身ヨネ 70歳 (S 61)	十日町市史編さん委員会『十日町の昔ばなし』1993
31	新潟県古志郡山古志村	京参り	富山の薬屋	BD	炭と豆が喧嘩 炭が怒りながら渡ったので	坂牧ミト 62歳 (S 4年)	水沢謙一『日本の昔話8』日本放送出版協会、1974
32	新潟県新発田市下高岡	三人で旅	薬屋	クラカゲ豆 BD	クラカゲ豆	石井ハナ (M 27生)	佐久間淳一『陰姿女房』桜楓社、1973
33	新潟県柏崎市	上方まいり	いとしげな娘	BD	消し炭	松谷ハツ 79歳 (S 35)	水沢謙一『雪国の夜語り』野島出版、1968
34	新潟県新発田市栗山沢	上方参り	めめのいい娘	ソラマメ	縫い方が悪く腹を下に出来ない 空を見て水に浸す	五十嵐長平 50歳 (S 36)	水沢謙一『師尾郷昔ばなし集』栃尾市教育委員会、1963
35	新潟県新発田市寒沢	京見物	いとしげな娘	BD		佐藤初雄 57歳 (S 41)	水沢謙一『雪国の夜語り』野島出版、1968
36	新潟県新発田市梅野侯	山へ遊びに	おばば	BD	今も豆炒りで、火を見ると笑って腹が切れる	香田イチノ 76歳 (S 47)	水沢謙一『師尾郷の昔ばなし』栃尾市史編纂委員会、1977
37	新潟県新発田市わさび谷	伊勢まいり	富山の薬屋	BD		佐野ミネ 76歳 (S 48)	水沢謙一『師尾郷の昔ばなし』栃尾市史編纂委員会、1977
38	新潟県新発田市西中野侯	上方まいり	富山の薬屋	BD		金内カン 76歳 (S 48)	水沢謙一『師尾郷の昔ばなし』栃尾市史編纂委員会、1977
39	新潟県新発田市松尾	旅	いとしげなあねさま	ABD		村田洋子 28歳 (S 51)	水沢謙一『師尾郷の昔ばなし』栃尾市史編纂委員会、1977
40	新潟県新発田市本所	旅	くすりや	BD	白い糸がないから	佐藤勇吉 83歳 (S 52)	水沢謙一『師尾郷の昔ばなし』栃尾市史編纂委員会、1977
41	新潟県新発田市新山	上方まいり	おばば	BD		林ヤス (M 44生)	水沢謙一『林ヤスの百物語』栃尾市史編纂委員会、1980
42	新潟県北蒲原郡豊浦町	上方まいり	娘	ソラマメ BD		波多野ヨスミ 65歳 (S 50)	水沢謙一『はばさるのトントムカシ』野島出版、1976
43	新潟県北蒲原郡豊浦町	上方参り	越中の薬屋	ソラマメ BD		波多野ヨスミ 68歳 (S 54)	佐久間淳一『波多野ヨスミ女昔話集』波多野ヨスミ女刊行会、1988
44	新潟県北蒲原郡豊浦町	上方参り	—	ソラマメ？	★○講談の国から来た豆、稲姫が笑う (母)	波多野ヨスミ 68歳 (S 54)	佐久間淳一『波多野ヨスミ女昔話集』波多野ヨスミ女刊行会、1988
45	※新潟県北蒲原郡水原町天神堂	上方参り			炭が渡り、豆が後から渡る	女性	新潟県立水原高等学校社会部『民話-水原周辺』1971

46	新潟県中蒲原郡村松町	野原へ遊びに	人だか神様だか		BD	白い糸がないから	吉田隆子 (M 40 生)	村松町史編集委員会【村松のむかし話】 1980
47	新潟県南蒲原郡中之島村	上方まいり	娘		BD	髪にさしていた黒い糸の針で	田中ツヨ 66 歳 (S 39)	水沢謙一【雪国の夜語り】野島出版、1968
48	新潟県三島郡出雲崎町	三人で旅	娘		BD		鈴木チノ 83 歳 (S 37)	水沢謙一【雪国の夜語り】野島出版、1968
49	新潟県三島郡越路町岩田	京まいり	替女		BD		金子セキ (S 50)	水沢謙一【替女のごめんなんしょ吉】講談社、1976
50	新潟県三島郡越路町	京参り	きれいな娘	ソラマメ	BD	腹が痛くて下を向けないのでそら豆に (仮)	高橋ハナ (T 3 生)	越路町史編集委員会民俗部会【ムジコととつろみ】 1995
51	山梨県西八代郡上九一色村	見物	お針の箱占唄り	ソラマメ	BCD	◎蚕豆 白い糸がないので	女性	土橋里木【縮甲斐昔話集】郷土研究社、1996
52	静岡県田方郡天城湯ヶ島町	—	お医者さん	ソラマメ	BD	▲ 白い糸がないから	鈴木みちえ (M 42 生)	鈴木通【全国昔話資料集成 30】岩崎美術社、1979
53	静岡県磐田郡竜洋町掛塚	二人で旅	医者	ソラマメ	D	そら豆と豆腐 大団我をして縫う	鈴木きよ	静岡県女子師範学校郷土研究会【静岡県伝説昔話集】谷島屋書店、1994
54	静岡県浜名郡芳川村	伊勢参り	お裁縫屋	ソラマメ	ABD	炭とそら豆が喧嘩 青糸がないから	金原せつ	静岡県女子師範学校郷土研究会【静岡県伝説昔話集】谷島屋書店、1994
55	滋賀県東浅井郡浅井町	遠足	—	ソラマメ	B	歌を歌い野道を歩く 炭ではなく下駄 縫うモチアイーナなし	上田幸子 (T 5 生)	國學院大學説話研究会【滋賀県湖北昔話集】 1985
56	京都府船井郡和知町	遊ぶ	—	ソラマメ	C	◎麦がら、えんどうが流れ、そら豆が泣く。炭を付けられる	才村さつ (M 27 生)	稲田浩二【丹波和知の昔話】京都女子大学説話文学研究会、1971
57	京都府竹野郡弥栄町	遠くへ遊ぶ	—	ソラマメ	BD	そら豆は助けなかったのが罰があたる	田宮よね (M 28 生)	稲田浩二【日本の昔話 21】日本放送出版協会、1978
58	京都府中郡大宮町新宮	遠足		ソラマメ	BD	靴、下駄、簀、の駄洒落あり。竹馬	女性	奥丹後地方史研究会【丹後の民話ふるさとのおかしな話】第二集】 1971 ごろ
59	三重県熊野市 (和歌山出身)	—	裁縫生	ソラマメ	BD	★◎大が熊を乗せて川を渡るのをみて (祖母?)	福島繁野 (M 33 生)	國學院大學説話研究会【三重県南昔話集・上】 1984
60	三重県南牟婁郡紀和町	—	—		BD	▲ 黒糸で縫ってもらったから	中家ひさ (M 39 生)	國學院大學説話研究会【三重県南昔話集・上】 1984
61	※和歌山県那賀郡貴志川町	旅	仕立て屋さん		ABD	逃げ出し四辻で出会う 石炭		中西包夫【貴志の谷昔話集】 1962
62	鳥取県東伯郡関金町	散歩	お裁縫の先生	ソラマメ	BD	暑くて炭が燃える そら豆、かや	崎上朝野 (T 7 生)	稲田和子編【鳥取県関金町の昔話】山陽学園短期大学昔話同好会、1972
63	※鳥取県東伯郡三朝町							関西外国語大学短期大学民俗学研究会【鳥取県東伯郡三朝町の昔話】 1984
64	鳥取県邑智郡石見町	逃げ出す	お医者様	ソラマメ	ABD		久長興仁	久長興仁【邑智郡昔話】「旅と伝説」40 号 1981
65	鳥取県八束郡鹿島町	遠足	—	なつ豆	B	縫わない。笑って口が裂けるのみ。	安藤勝子 (M 4 1 生)	鳥取大学昔話研究会編【鳥取半島漁村民話集】Ⅱ、1982
66	鳥取県隠岐郡西ノ島町	旅		ソラマメ	BD	夏豆 (ソラマメ)、緑香	村尾富夫 (空欄)	鳥取大学昔話研究会【隠岐西ノ島町・海士町昔話集】 1977

67	岡山県岡山市	旅	—	自分で?	ABD	豆は渡る、腹が思いやりがないと怒る	守尾薫	岡山民話の会『なんと昔があったげな下』1964
68	岡山県阿哲郡哲西町	旅	呉服屋	ソラヤマ	D	◎夏豆 薬が焼き切れ怪我をする	賀島茂左 (M29生)	稲田和子・立石徳利『日本の民話9』きょうせい、1979
69	山口県大島郡城和町	山	—	こや豆	-	◎こや豆 こや豆が焼けてとして黒くなる	—	宮元常一『周防大島昔話集』瀬戸内物産(有) 出版部、1965(初版1966)
70	高知県香美郡土佐山田町	なし	女中勤め傭り娘	大豆	BD	豆腐はトフトフ流れる。大豆	吉田多加恵 88 歳	桂井和雄『全国昔話資料集成 2』岩崎美術社、1977
71	※高知県香美郡香北町	遊ぶ	通りがかりの人		ABD		男性	赤石元治『土佐の民話 82 そら豆の黒いすじ』
72	※佐賀県							厳木町教育委員会『厳木町文化財調査報告書第三集』1980
73	佐賀県伊万里市	どこかへ見物	糸と針と靴いさん	ソラヤマ	ABD		松尾テイ (T3生)	宮地武彦『肥前伊万里の昔話と伝説』三弥井書店、1986
74	※熊本県阿蘇郡白木村	逃げ出す	女の子		ABD	笑いすぎであごがめれる	女性	阿蘇藩N°225(西南学院大学民俗学研究会・立命館大学有志他)
75	熊本県天草郡	旅	—			◎真っ赤になった薬を渡ったので、黒くなる	有江道博	濱田隆一『肥後天草の民謡』(二)『郷土研究 第5巻4号』1981
76	宮崎県東諸県郡綾町	旅	富山の薬屋		BD	(新潟県の富山の薬屋)	吉川親雄 75 歳	ロバート・J・アダムス調査『日向民俗 22』日向民俗学会、1967
77	長崎県下県郡	川を渡る	医者		D	◎麦藁と一緒に渡り、豆が頭に怪我をする	扇フジシ 歳	鈴木栄三『くったんじいの話』未来社、1968
78	沖縄県中頭郡読谷村	—	—	ソラヤマ	D	★そら豆がおしやべりなので口を縫われた	新垣カメ (T2生)	読谷村教育委員会『伊良皆の民話』1979
79	沖縄県中頭郡読谷村	—	—	ソラヤマ	D	▲黒い糸で縫ったので。	呉屋イナ (M18生)	読谷村教育委員会『伊良皆の民話』1979
80	※沖縄県島尻郡伊是名村							伊是名村教育委員会『伊是名島の民話』1983

I の冒頭部分あり A

笑って腹が裂ける B 笑って口が裂ける B'

あごがはずれる B''

友達が流されたので泣く C

黒糸で縫う D

▲断片

★変形

◎豆が意地悪なわけではない

注 1) 『日本昔話大成』、『日本昔話通観』を参考にし、その他音見のかぎり集めた。
注 2) ※は原典に当たれなかった資料